

衝立と屏風



写真は横浜館 1F に、展示中の衝立(左)と屏風(右)です。



衝立の大きさは、縦 120 横 115 cm
です。

大枠と中 5 本の木枠が前と後で「直径 5 cm 長さ 89 cm のセルロイド管 135 本」を支えています。セルロイド管を拡大しますと写真のように隙間がみえます。

屏風は、1～4 曲を蝶番で繋いで 1 セットです。1 曲は直径 2 mm 長さ 400 mm のセルロイド管を上から下へ、簾(すだれ)のように繋ぎ、前後を木枠 4 本で占めています。空き間ができて透けてみえます。すだれ屏風といわれ、涼しさを演出しています。



セルロイドハウス横浜館に展示中の衝立と屏風は、全てセルロイド製品です。

この衝立と屏風が作られたのは、1921（大正 10）年～昭和 13 年と、第二次世界大戦終了後の 10 年間でした。

あの時代の日本は、関東大震、経済恐慌、戦争そして敗戦の大変な時代でした。そんな時につくられた衝立と屏風は、素材のセルロイドが珍しく軽くて綺麗で空気も通す、実用的でデザインも良く、かつ庶民にも買える値段でしたので大量に販売された記録が残っています。

横浜館 3F・セルロイドすだれ屏風



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

先日（平成 28 年 7 月）、東武鉄道・東京スカイツリー駅近くの片岡屏風店さんを訪ねました。

横浜館書庫に成美堂出版 1999（平成 11）年 2 月 25 日発行の「小さな博物館」という雑誌があります。

片岡さんの記事が載っていました。

片岡さんは、昭和 21 年に父親がこの地で屏風店を開業。現社長は 2 代目で、平成 8 年から博物館も兼営されておられます。奈良時代から江戸時代末期までの衝立・屏風・紹介パネルなど現物 1000 点以上が展示されておりました。

片岡さんはセルロイドの衝立と屏風も作った、と伺いました。偶々、3 人の来客と商談中でしたので時間がとれず、大変心残りがありました。



☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

江戸時代

徳川家光（1624～44 年）が第 3 代将軍になった頃から、江戸城、江戸の名所・旧跡・風俗を画題とした金碧型の江戸図屏風が成立しました。

そして東海道・中山道・甲州街道・日光道中・



奥州号中の街道や宿場、武蔵野の狩り、原野も江戸金屏風の画題となりました。



江戸幕府は、江戸城障壁画や贈答用の絵画制作、将軍への絵の手ほどきのために絵師を抱えていました。当時、そのような絵師は御絵師と呼ばれていました。

江戸幕府が倒れ、明治時代になると御絵師たちは失職しました。世間では西洋文化が流行し、屏風絵は見向きもされなくなりました。絵師たちは、明治政府に勤めたり、海図製作など絵に関係ない仕事につきました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

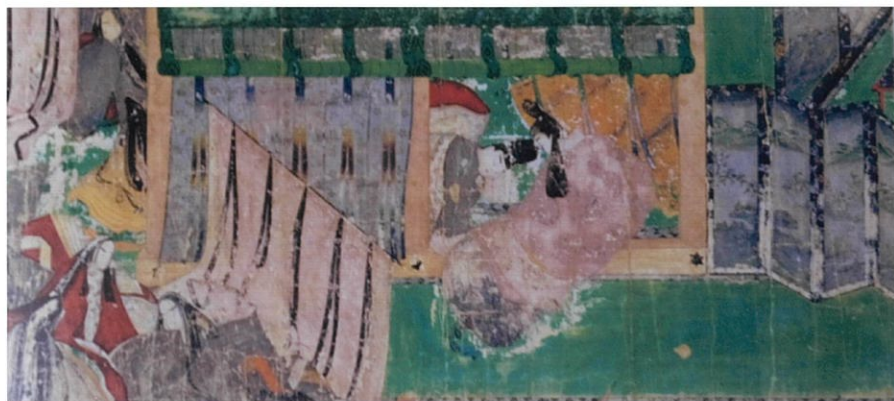
むかし、唐の国でつくられた、樹下の尾長鳥の絵「鳥木石夾けらの屏風」の左右2扇、が輸入されました。(現在・宮内庁正倉院保存)

時が経ち平安時代となり、紫式部が宮廷を題材にした「紫式部日記」を書きました(1008~10年頃)。その日記が源氏物語として誉れ高く、日本文学の最高傑作と評されるようになりました。源氏物語は今では日本のみならず世界各地でさらに研究が続けられております。

紫式部の死後、150年ほど経ったころ『源氏物語絵巻』が誕生しました。

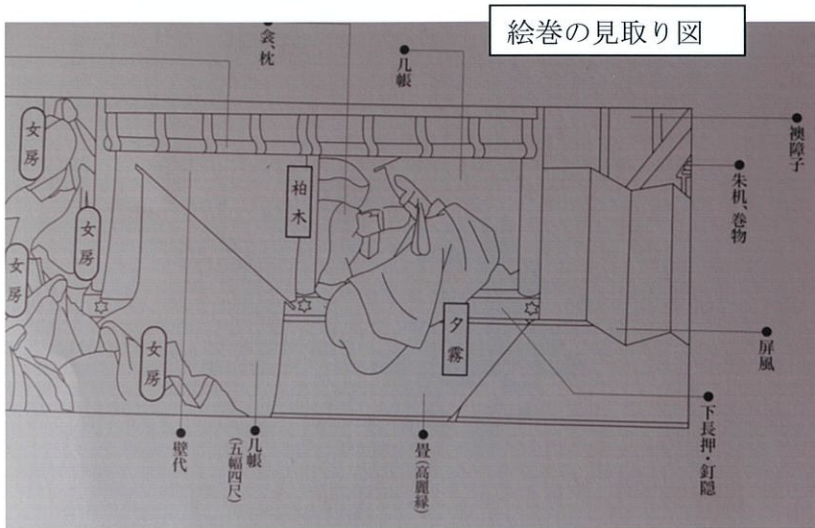
『源氏物語絵巻』は、源氏物語の第1~54帖までの各帖から2~3場面を撰んで絵画にし、そこに詞書(ことば)をつけたものです。

次の写真は『源氏物語絵巻』の第36帖、柏木2」の絵と詩書です。右の隅に、屏風が描かれてあります。屏風の絵の中に、屏風が描かれてあるのです。



詩書





3頁の絵巻、詩書および見取り図の3枚は、右上写真の本『国宝源氏物語絵巻』P. 60 /61 を写したものです。

この本は（財）五島美術館から2010（平成22）年11月に発行されました。この本を読んで『源氏物語絵巻』の概要が掴めました。そして横浜館のセルロイドの衝立や屏風の原点が、1000年前にあったのだ、と痛感いたしました。

『国宝源氏物語絵巻』54帖のうちの現物の多数が、東京都世田谷区五島美術館と、名古屋市の徳川美術館に残されています。



衝立の現状について

衝立は、パーティション（間仕切り）として作られ各事務所で活躍しています。しかし、パーティションは、現在の日本家屋様式に不向きなのか新築家屋には殆ど使用されていないようです。



上写真2枚、さいたま市立図書館のパーティション

平成28年7月25日（了）